

# 国土審議会第6回北海道開発分科会議事録

日 時：平成19年2月5日（月）

場 所：全国都市会館 第3・第4会議室

国土交通省北海道局

## 国土審議会第6回北海道開発分科会議事次第

日時：平成19年2月5日(月)  
12:30～14:30  
場所：全国都市会館  
第3・第4会議室

1. 開会
2. 委員紹介
3. 副大臣挨拶
4. 議事
  - (1) 第6期計画の点検と新たな計画の在り方について
  - (2) その他
5. 閉会

### (配付資料)

- |     |                           |
|-----|---------------------------|
| 資料1 | 国土審議会北海道開発分科会委員名簿         |
| 資料2 | 第6期計画の点検と新たな計画の在り方 報告書    |
| 資料3 | 第6期計画の点検と新たな計画の在り方 報告書の概要 |
| 資料4 | 基本政策部会の調査審議の経緯            |
| 資料5 | パブリックコメント                 |
| 資料6 | 次期計画策定に係る今後のスケジュール (イメージ) |
- 
- |       |                           |
|-------|---------------------------|
| 参考資料1 | 国土審議会北海道開発分科会の調査審議事項等について |
| 参考資料2 | 国土審議会北海道開発分科会基本政策部会委員名簿   |
| 参考資料3 | 国土審議会北海道開発分科会関係法令等        |

## 国土審議会第6回北海道開発分科会

平成19年2月5日（月）

### 開 会

○山下総務課長 それでは、ただいまから第6回の北海道開発分科会の調査審議を開始をいたしたいと存じます。

本日は、皆様お忙しいところをお集まりいただきまして、大変ありがとうございました。

私は、本日、事務局を担当いたします国土交通省北海道局総務課長の山下でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本分科会は、本分科会に属することとされました国土審議会委員3名及び国土審議会特別委員16名の計19名から構成をされてございます。本日の分科会は、国土審議会北海道開発分科会の委員及び特別委員総数19名のうち、定足数でございます2分の1以上の10名を超えます11名のご出席をいただいておりますので、国土審議会令第5条第1項及び第3項の規定によりまして成立をいたしてございます。

なお、本日の会議の公開につきまして、申し述べさせていただきます。

国土審議会運営規則第5条及び第1回北海道開発分科会決定によりまして、原則として、会議及び議事録を公開することといたしてございます。議事録につきましては、原則として発言者氏名入りで公開をするということとされてございますので、あらかじめご承知おきをお願いいたしたいというふう存じます。

それでは、本日ご出席の委員及び特別委員の皆様のご紹介をさせていただきます。

まず、丹保憲仁分科会長でございます。

○丹保分科会長 丹保でございます。

○山下総務課長 以下、名簿順にご紹介をさせていただきます。

まず、衆議院の推薦による特別委員といたしまして、飯島夕雁委員でございます。

○飯島委員 飯島でございます。よろしく申し上げます。

○山下総務課長 金田誠一委員でございます。

次に、参議院の推薦による特別委員といたしまして、中川義雄委員でございます。

○中川委員 どうぞよろしく。

○山下総務課長 次に、地方公共団体の長の特別委員といたしまして、上田文雄委員の代理として下村市民まちづくり局長にご出席いただいております。

○上田委員代理（下村市民まちづくり局長） よろしく申し上げます。

○山下総務課長 高橋はるみ委員の代理といたしまして、嵐田副知事に出席をいただいております。

○高橋委員代理（嵐田副知事） 嵐田でございます。よろしく申し上げます。

○山下総務課長 次に、学識経験を有する委員及び特別委員といたしまして、井須孝誠委員でございます。

○井須委員 井須でございます。

○山下総務課長 北島哲夫委員でございます。

○北島委員 北島でございます。

○山下総務課長 生源寺眞一委員でございます。

南山英雄委員でございます。

森地茂委員でございます。

○森地委員 よろしく願いいたします。

○山下総務課長 なお、石崎岳委員、丸谷佳織委員、吉川貴盛委員、小川勝也委員、橋本聖子委員、家田仁委員、岩沙弘道委員、見城美枝子委員につきましては、所用によりご欠席との連絡を受けております。

続きまして、国土交通省の出席者をご紹介します。

まず、望月副大臣でございますが、公務のため、やや遅れて出席ということになってございます。よろしく願いいたします。

品川北海道局長でございます。

○品川局長 よろしく願いいたします。

○山下総務課長 奥平審議官でございます。

○奥平審議官 よろしく願いします。

○山下総務課長 井置審議官でございます。

○井置審議官 よろしく願いします。

○山下総務課長 本多北海道開発局長でございます。

○本多開発局長 本多です。

○山下総務課長 そのほか、北海道局の各課、各室長が出席をいたしてございます。

それでは、これ以降の会議の進行につきましては、丹保分科会長にお願いをしたいというふう存じます。よろしく願いいたします。

○丹保分科会長 お忙しいところを今日はありがとうございました。分科会はなかなか日程調整がうまくいきませんので、今日は久しぶりに開かれましたので、実のある会合ができるとよろしいなと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

前回は17年の11月24日とここに書いてありますが、第5回の分科会を開かせていただきました。そして、今日の主題でございます第6期の計画につきまして、分科会のもとに基本政策部会をつくらせていただくということになりました。南山委員を部会長といたしまして、基本政策部会が随分一生懸命回を重ねた議論をしてくださいまして、今年の2月にご報告を頂戴するということになっておりました。今日は、その基本政策部会からいただきますご報告をもとにいたしまして、いろいろ皆様のご意見をいただきたいと思います。

っております。第6期の計画が一応終わりに近づいております、国土交通省では政策レビューをしたり、省議決定をしたりしまして、新たな計画をつくるという段階に入るわけでございますが、この基本政策部会のご議論を参考にいたしまして、この分科会でこれも申し承りいただけるものであれば、これをベースにいたしまして、またさらに議論を次に展開できたらよろしいかなというふうに思っております。

まず、最初の議題でございますが、といっても一番大きな議題でございますけれども、第6期計画の点検と新たな計画の在り方について、南山部会長からご説明をいただきながら、ご意見を頂戴したいと思っております。南山さん、どうぞよろしくお願いいたします。

○南山委員 基本政策部会長を仰せつかっております南山でございます。

基本政策部会の報告につきまして、ご報告をさせていただきます。

最初に審議経過ですけれども、お手元の資料4に審議の回数を書いてございますけれども、平成17年12月の第1回部会以降、当分科会から付託されました2つの課題、第6期計画の点検に関する事項及び新たな計画の在り方に関する事項、これについて、18年の2月までに報告を出すべく、9回にわたって部会を開催いたしました。

調査審議を進めてまいりましたが、特に第2回と第5回、これは札幌で開催いたしました。

最初に、現在の第6期計画の点検を行い、時代の潮流の変化を踏まえた、新たな計画の在り方如何ということで議論を行いました。各回、大変多くの方に出席いただき、熱心な議論をいただきました。この中で文案に関する審議を行い、一応の案をまとめましたが、今回は新たな計画の在り方等に関して、国民の幅広い意見を反映させるということから、平成18年の9月、第8回の基本政策分科会において「中間とりまとめ」を公表いたしまして、10月16日から12月1日まで、これに関する意見の募集を行いました。いわゆるパブリックコメントを行いました。

意見募集の結果は、件数にして1,062件ということで、大変大きな数のご意見が寄せられました。北海道に対する関心が高い、そういったことのあらわれだというふうにとりまとめております。

18年12月の第9回の基本政策部会におきまして、パブリックコメントの結果をとりまとめ、この意見に対する対応への検討、あるいは議論を踏まえて、中間とりまとめの修正などを行って、これまでの部会での議論を総括した形で報告書を取りまとめました。

報告書の構成ですが、目次のところをご覧になっていただくとおわかりのように、構成はそのとおりでありますけれども、これをまとめるにあたりましては、国土形成計画、あるいは北海道の総合計画、この策定作業が行われている中でありますので、部会委員の皆様のご議論を踏まえながら、将来の北海道に関して、国民の皆さんが少しでもイメージしやすくなるように工夫をいたしました。詳しくは、後からまた事務局からご説明をいたします。

この結果、報告書の構成は、第Ⅰ章が「大転換期における北海道開発」、第Ⅱ章が「第6期計画の点検」、第Ⅲ章が「今後の北海道開発の取組の方向性と進め方」ということでまとめました。

特に、第Ⅲ章については、将来の北海道総合開発計画について、少しでもそのイメージが明らかになるように、そのために現時点で考えられる将来への具体的な取組、そういったものを可能な限り記述するようにいたしました。

ポイントを若干申し上げますと、最初の付託された事項の第6期計画の点検に関する事項でありますけれども、第6期計画期間は、当初計画時の予想を非常に上回る勢いで時代が変化いたしました。それにもかかわらずいろいろな施策において一定の成果が得られたということ、ある意味では北海道の成功事例とも呼べる成長の芽が幾つか見られるようになったのではないかと考えております。

例えば、1次産業、特に農業、漁業、これの発展によって食料基地としての役割が十分に果たされていると。あるいは観光客、なかんづく外国人観光客がこの期間中で3倍以上に増えるということで、観光立国日本としての発展に大きな役割を果たしている。また、産業クラスター活動の支援を行ったこと等により、ITとかバイオ産業など、これからますます成長が期待できる新しい産業の芽が見られるようになってきている等々の成果がございます。これには限りませんが、一定の成果が見られるということでもあります。

また、今後の課題といたしましては、特に第6期計画当初の予想を上回る人口の減少とか、あるいはグローバル化が進展する、財政事情の悪化等、新たな課題が顕在化されました。そういう中で、地域の活性意義について、例えば、基盤整備を超えて、人々の住まい方とか暮らし方、あるいは経済活動については、経済活動の在り方そのものを変えていくといえますか、変革していく、そういう必要がある。そういう中で時代の変化に沿った施策の転換が必要だということがまとめられております。

また、地域、あるいは民間との連携・協働、こういったものの強化、それから、事業の重点化、効率化、効果的な先駆的な取組の一層の拡充、こういった等々の改善が必要であるというふうに評価いたしております。

北海道開発の在り方について申し上げますと、これは後で詳しくご説明がありますので、簡単に申し上げますと、北海道開発につきましては、この在り方をめぐって、過去から現在まで、いろいろなご意見が寄せられております。そういう中で、基本政策部会では、21世紀における我が国が抱える課題に目を向けて、北海道開発が取り組むべきものは何か、これを明らかにしていくことが重要であるという認識に基づいて議論がなされました。

その結果、今日の北海道開発の在り方は、我が国を取り巻く環境の変化に対応して、北海道の持っている優れた自然とかいろいろな特性、そういったものを活かしながら、国の課題の解決に貢献する、と同時に、活力と競争力がある地域経済社会、これの形成を図ることを目指すべきであるという結論に至りました。

このためには、第6期計画の目標年度を現在迎えようとしているわけですが、国としては新たな北海道総合開発計画を策定すべきであるというのが基本政策部会各委員の共通の認識であり、また本報告書のポイントでもあります。

今後、次期計画に関します検討を開始することになるというふうに承知しておりますけれども、具体的な検討を行う際には、この報告書をたたき台にさせていただいて、議論をさらに深めていただくことをお願いいたします。

次期の計画が、我が国が直面する課題の解決に貢献するとともに、夕張市の破綻、あるいは雇用情勢の悪化など、大変厳しい状況にある北海道が、この状況を打破して、人々が将来に明るい希望を持つことができるようになることを我々としては期待してやまないところであります。

それでは、報告書の内容につきましては、事務局からご説明をお願いいたします。

○丹保分科会長 どうもありがとうございました。南山部会長からご説明をいただきました。詳細につきましては、続けて事務局から逐次ご説明してもらいますけれども、いま、望月副大臣がお見えになりましたので、まずご挨拶をいただきたいと思います。

○山下総務課長 それではご紹介いたします。望月副大臣でございます。

○望月副大臣 どうも皆様、本日はお忙しいところ、ご出席賜りましてありがとうございました。国会議員の諸先輩の皆様方もご臨席でございまして、大変ご苦勞さまでございます。

ご紹介いただきました副大臣の望月義夫でございます。日ごろ、国土交通省の諸施策につきまして、皆様方からいろいろご指導・ご協力いただいておりますことに心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

本日、平成19年度を目標年次とする第6期の北海道総合開発計画のとりまとめに向けて、先ほどからいろいろご紹介ございましたようでございますけれども、私たちが今年は大変大切な年であると、このように考えております。そういった意味では、いろいろ今までのまとめをしていかなければならない、その評価と、また新たな出発点をどこに探るかということについて委員の皆様方にご意見いただければと思っています。

また、パブリックコメントの中で1,000件以上のいろんなご意見があったと聞いております。これはまさに、これまでの評価といいますか、北海道の将来に対するいろんな温かいご意見をいただいたものと我々は認識しておりますし、また、その期待の大きさがそこにあらわれているのではないかと、このように思っております。

そういった意味で、今日この分科会をぜひひとつ実り大きいものにしていただければと、このように思います。

実は、私は静岡県清水というところの出身でございまして、一年中雪が降ったことがないんです。私が国会議員になって東京へ来て、初めてコートというのを買いました。そういう意味では、北海道の皆様方のご苦勞というのはなかなか実感としてわかりづらい面

があります。ただ、テレビを見たり、いろんな経験を伺ったりする中で、大変厳しい、我々から見ると厳しい環境の中で、皆さんが未来を目指しているいろんな仕事をしていらっしゃるということを、頑張っておられるなどということを感じております。国土の4分の1を占め、また、カロリーベースから言っても、農業生産高等、私たちの国にとって大変大切な北海道でございます。私、実は八百屋のせがれでして、タマネギとかニンジンとかキャベツとかの話題は実感としてよくわかるんですけども、北海道で生産がタマネギとか馬鈴薯とかできないと、大暴騰するんですよ。そういったときに、一体これはどこのものだと。北海道のものだと。ああ、北海道って大切なところなんだなというようなことを、改めて強く感じます。ただし、その逆がありまして、できすぎちゃうと大暴落ですよ。全くトラックで、どこか畑の中へもう一回埋めなきゃならないと、こういうような状況、ご苦労が非常にたくさんあると思います。

そういった意味でも本当に大切な北海道をどういうふうにかかしていったらいいのか。私は、北海道というのは非常に大きなポテンシャルがあると思っております。したがって、ぜひひとつそういった意味で、国民のために、北海道が今後新しい出発をしていくためのしっかりしたとりまとめをよろしく願いしたいなと、このように思っています。

我々国土交通省としても皆様方のご指導をいただきながら一生懸命進むことをお誓い申し上げます。一言ごあいさつにかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

○丹保分科会長 どうもありがとうございました。

それでは、いま南山さんからご説明いただきました件を、今度は事務局からさらに詳細に説明をいただこうと思っておりますが、いま望月副大臣からお話がありましたように、北海道というのは、日本の全体から見ると、随分遠いところなんですね。私はその一番北の端の稚内の近くで生まれまして、札幌で育ちました。東京へやってきました、いま国土審議会の北海道開発分科会の会長と首都圏の部会長、両方させられております。極端な差を頭の中でどう処理するかということに戸惑っておりますけれども、私なりにいろいろ考えたこともあるのでございますが、ぜひぜひ北海道は首都圏と並んで、日本の中で意味のあるものにならないといけないと思っておりますので、どうぞみんなでいいご議論をいただきまして、将来の日本のために、北海道が十分に尽くせるように働きたいなと思っております。

事務局が一生懸命苦労してくれました。参事官から説明してくださいませか。

○高松参事官 北海道局参事官の高松でございます。

資料でございますが、資料2のほうにつきましては報告書の全文を、資料3につきましてはそれを要約したものを用意させていただきました。こちらの資料3の方で報告書の概要についてご説明させていただきたいと思っております。

表紙でございますとおり、点検に関することと、新たな計画の在り方に関することの2つのポイントに分けて要約させていただいております。



1 ページでございますが、第6期北海道総合開発計画、今の現行の計画の点検の概要でございます。

点検のポイントといたしましては、この第6期計画においては主要施策ということで、5つの施策の柱に基づいて進めるということになってございます。

点検の手順といたしましては、この施策に基づきまして、その進捗状況、成果の点検を行わせていただきました。また、併せて施策の進め方、推進体制について、連携・協働、あるいは重点化・効率化などについて記載し、その状況についても成果を点検したところでございます。

進捗状況の点検結果でございますが、詳しい資料は部会資料などで既に公表させていただいております。食料基地の役割強化、あるいは国際観光の進展など、諸施策におきまして、一定の成果が得られてございます。また、成功事例と呼べるような新しい成長の芽が散見されてございますが、想定を上回る人口減少、あるいはグローバル化の進展、財政事情の悪化などに起因する新たな課題も顕在化しているところでございます。

推進体制におきましては、シーニックバイウェイ北海道など、制度設計のフロンティアとなる先駆的・実験的な取組を実施し、一定の成果が見られているところでございます。

また、施策の効果を一層高めるための連携・協働の強化、あるいは昨今の財政制約などを背景といたします一層の投資の重点化・効率化などが喫緊の課題であります。

総括的に評価いたしますと、時代の潮流に起因する新たな課題への対応、連携・協働の強化、重点化・効率化など、事業の進め方に関する諸改革、北海道の実情に即した効果的な先駆的・実験的取組の一層の充実、このようなことについて一層の改善が必要という評価結果になっております。

次に、新たな北海道総合開発計画の在り方の概要でございます。

ポイントといたしましては、2ページから3ページ目にまとめさせていただきました。大転換期における北海道開発ということで、我が国をめぐる環境の変化、すなわち、人口減少、少子高齢化、グローバル化、あるいは地球環境問題など、我が国は大きな課題に直面しております。

こういった中、北海道においては、これまでの北海道の開発の歴史、あるいは現状、それから、自然を中心とします北海道の資源・特性、こういったものを生かしながら、これからの北海道開発の基本的課題は何かというような観点について議論を進め、その結論として4点ほどまとめさせていただいております。

グローバル化についてであります。急成長し、国際分業化が進むアジアを念頭に、北海道は、アジアの人々を引きつける自然環境、食など、優れた特性・資源を活かして、地域としての独自の役割を担って発展していくチャンスが訪れているということでございます。

2点目として、自然環境・エネルギー問題であります。地球環境問題の顕在化、世界

の自然環境の悪化、天然資源の減少というのは憂慮すべき段階に達しております。自然との共生は、持続可能な経済社会にとって必要不可欠でありまして、北海道の豊かな自然環境を維持し、その価値の向上に取り組んでいかなければならない。また、化石燃料依存度の高い北海道が豊富に有する自然エネルギー源を生かし、エネルギー問題等について先導的な役割を果たすべきであるということでございます。

3点目としては、人口減少・少子高齢化が進み、集落のみならず広域的な生活圏の中心都市の機能低下が懸念されておるところでございます。このため、生産面や生活面で定住性を高めるための取組、多様な人口交流を増大させる活性化施策など、政策努力を実施し、活力ある地域社会のモデルを北海道で形成することが必要であるということでございます。

そして活力と競争力ある地域経済社会の形成ということで、北海道が活力ある地域として発展していくことが必要であり、このための取組が必要であるという結論でございます。

その下には、北海道開発の在り方ということで、先ほど部会長からご説明があった内容について記述させていただいております。

それから4～5ページ以降には、今ご説明させていただきました柱に沿った形で具体的な取り組みのポイントをいくつか例示させていただきました。これらも今の2～3ページでご説明させていただいた柱の枠組みの中でまとめさせていただいているところでございます。

以上、報告書を資料3でご説明させていただきました。

また、資料6につきましては、補足的に今後のスケジュールについてご説明させていただきたいと存じます。今後のスケジュール（イメージ）を一枚紙で用意させていただきました。特に、今ご説明させていただきました点検の部分でございますが、国土交通省の政策レビューに北海道総合開発計画を取り上げることが決まっております。そのため、今のご説明させていただきました点検のところを使いまして、年度内には省議決定という手続に持ってまいりたいと考えております。

それから、新たな計画の在り方についてでございますが、これを踏まえ、まだ国土審議会には大臣諮問の手続をとってはおりませんが、今後そういった手続に入ってまいりたいと考えております。なるべく早い段階で、次期計画の策定に関する分科会等を進めてまいりまして、目標としては、来年度末、平成20年3月に次期計画の閣議決定に持ってまいりたいと、このようなスケジュールを考えているところでございます。

以上でございます。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

随分たくさんのご意見を駆り込んでいただきましたので、さらに加えていただかなければならないことが多いんだろうと思いますが、どうぞございましょう。審議会から部会にお預けをいたしました議論にご参画いただきました委員の方からもしありましたら、補

足的なキーワードのご発言をいただけますでしょうか。生源寺先生いかがでしょうか。

○生源寺委員 特に発言準備してきたわけではございませんけれども、かなり回数を重ねて、かつ、非常に包括的なレビューなりを南山部会長の下でうまくまとめられているのではないかなと、こういうふうに思っております。

私自身、農業・農村が専門の領域でございます。レビューの結果から言いますと、順調といたしますか、比較的成果が上がっている部分ということかと思えます。これは、北海道に暮らす方のみならず、日本に住んでおられる方全体にとっての食料の安全保障なり、あるいは一種の安心感を支える力強い農業地帯という意味では一定の役割を果たしてきているわけでありまして、今後ともそれが必要だということがあるわけでございます。

この中にもある程度そういうことが書き込まれておりますけれども、あえて、今後の課題としてあるかなと思えますのは、非常に力強い農業ということではございますけれども、ある意味では非常に農業らしい農業ではあるんですけれども、農業経営として見ますと、少し厚みに欠けるところがあるという、ちょっと妙な言い方になりますけれども、規模という点では、これは日本でトップ、ヨーロッパ並みではございますけれども、こういう土地利用型で規模を追求する農業であっても、おそらくアメリカとかオーストラリアとは違って、品質のよいものをつくったり、あるいはもうすでに北海道の水田地帯なんかではございますけれども、例えばイチゴの施設栽培とか、あるいは私の知っているもので言いますと、完熟トマトをジュースにして販売するとか、つまり、農業も集約的な農業を組み合わせたり、あるいはそれを加工したりするようなことも加える中で、経営の厚みを増していくということ、これはおそらく日本と欧米とも少しくロスするような北海道の特徴を生かす道ではないかと、こんなふうに思っております。

今のところ、日本全国を見ますと、特に土地利用型農業は非常に担い手の脆弱化が顕著で非常に危機的でございますけれども、北海道はそこはないかと思えます。ただ、日本全体の担い手不足も、別にこの5年10年で生じた現象ではないわけでありまして、40～50年前若かった方の就業選択の結果、あるいはその後の就業選択の結果が累積してこういう状況になっております。したがって、今から30年後、50年後の担い手をきちんと見据えた、特に外からの人を受け入れるという意味で非常に北海道は開放的な風土があることもございますし、そのあたりも書かれておりますけれども、留意する必要があるかなと。これは全体の計画でございますので、こういう形でありますけれども、部門別に見ますと、あるいは支庁別に見ますと、ちょっと黄色信号というところも私はあるように思っておりますので、そのあたりは、次の計画をつくっていく際には、かなり突っ込んだ議論をする必要があるかなと、こんなふうに思っております。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

規模だけでなく厚みと言いましょかね、中身の詰まった、文明度の高い農業経営と言いましょかね、農業だけじゃないことのリンクはたぶん前から議論されていることだっ

たんだと思いますが、どうもありがとうございました。

あとはメンバーでは、嵐田さんは副知事として入っていただいているから、何かお立場上お話しいただけますでしょうか。

○高橋委員代理（嵐田副知事） 私も基本政策部会の委員として参加をさせていただき、道の考え方など必要な意見を申し上げてきたところをごさいますて、今回の報告書には、基本的には私どもの考えを反映していただいております、とても感謝をしているところをごさいます。

例えば報告書の30ページで、機能の異なる地域ごとに必要とされる政策が異なってくるということで、今後の地域区分の考え方について道庁との連携が重要だということを書き込んでいただいております、私どもとしてもこれから計画づくりが本格化するわけですので、北海道局と今後とも連携を密にさせていただきたいと思っております。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

南山部会長、部会長として、何か南山委員としては何かご発言はありますか。

○南山委員 部会長としては、先ほど申し上げたことに尽きるわけですが、率直に言わせて、これが始まる時にいろいろな議論のある中で、どういう形でまとめられるかなという一抹の懸念はございました。しかし、オープンになってみますと、皆さん非常に本当にいろいろな部門からの意見が出され、そして、それも、こうやったら国のために役に立つのではないかと、こうやったら北海道はよくなるじゃないかと、こういうことはまだ手をつけてないとか、これはやるべきであるとか、こういうことをやったけれども、これはもうやめるべきだとか、本当にまさに基本政策部会で議論すべき、反映すべき意見を、ほとんどすべての方から出していただいたと言ってもいいかと思っております。

そういう意味では、私は事務局の方に、いろいろな意見があったから大体こんなことでまとめるんでしょうねというような話をしておけばよかったんですけども、事務局の方はそれを全部まとめるのは大変だったと思っておりますが、ご覧になって、ある感想では、非常に総花的だと見ることもできるかもしれませんが、しかし、北海道開発の中にはいろいろな面があることをまた如実に表しているし、それをまとめるとこういう形になるので、今度、計画のときにはこれをさらに具体化して、ある焦点を絞った形で、現状を考えれば、目鼻をはっきりした形でやっていかざるを得ないと思っておりますので、次の計画にこれが反映されることを期待しております。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

ご関係になった方ではないんですが、森地先生は実はこの第6期の計画策定後の中間段階の点検のときの部会長でございますので、森地先生からもし何かご感想、ご発言があれば頂戴したいと思います。

○森地委員 ありがとうございます。先日説明をしていただいた後、もう一回ずっと読んでみまして、思っているようなことはすべて書いてあると思いましたが、大変わかりやす

く問題点が提起されていると思います。これについては、そういう意味で大変な報告書だと思っております。

これから計画をつくっていく上でのコメントを少しさせていただきたいと思います。実は、いろいろなところで私自身「アジアの宝、北海道」ということをこの何年間言い続けてきました。その意図は、ここにおられる役所の方には何度も申し上げているんですが、1つは、北海道の人にもう一回誇りを持ってほしい、元気が出ないことにはどうしようもないではないかという、それが第1点目でございます。

2番目は、日本の中の北海道ではなくて、国際社会の中での北海道ということ、観光だけではなくてすべてのことについて意識したほうがいいのではないかと。

それから3番目は、そういう目で見ると、もう一回いろいろなことを再点検したらどうだろうか。教育も農業ももちろんでございますが、諸々の活動すべてを、国際社会の中での北海道ということで申し上げたつもりでございます。

次の計画をつくっていくときに、もうここに書いてあることすべてが重要なわけですが、私自身はこういうことを思っています。1つは、やっぱり国際化という視点が、今申し上げた意味で何か欠けているところが随分ありそうな気がいたします。そうやって見たときにいろいろなことができる。国際化というのがキーワードの1つでございます。

それからもう一つは、生源寺先生が農業について言われましたが、やっぱり北海道の一番の課題は産業を重層化することではないかと思っておりますので、もうそこに焦点の1つを当ててほしいと。

3番目が、北海道ブランドは非常に高いんだけど、地域ブランドが極めて均一的でどこへ行っても北海道という、そこを何とか地域を多様化させるのにどうしたらいいかというのが3番目でございます。

最後は、ちょっと苦言でもあるんですが、皆さん北海道の方々大変いい人々で、議論してくると大変前向きなんです、どうも行動に欠けるところがあるんじゃないか。「行動する人々」とか、何かそんな4つぐらいが、私自身が次に計画をつくるときに道民の方に訴えたいかなと思ったことでございます。

大変乱暴なお話で恐縮でございます。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

それでは、分科会の委員の方々から、今のご報告を承りながら、むしろこの部分を補って、次に計画を立てる方向でのご提案なりご感想がございましたら、何もそれに限る必要はないんですが、ご発言をいただける方からいただきたいと思いますが、どなたからでも結構でございますけれども、どうでしょうか。前期からでは、井須さんがずっとやってくださっていますので、何かもしございましたら、現場の指揮者でもありますので。

○井須委員 ご指名でございますから、ちょっとだけ。この報告書を読ませていただきまして、大変私は感動して読ませていただいたんです。本当に気配りよく、非常に難しい報

告を的確にこれだけの文章でおまとめになられたと、これをまず大変御礼と感謝と敬意を表したいと思います。

こういう報告書の通例といたしまして、抽象的になるのはやむを得ないことでありますね、なかなか具体化まではいかない。ただ、これを読みながら私痛切に感じておりましたのは、こうしているうちも世の中はものすごく進んでおりまして、北海道の農業なんていうのは、今オーストラリアとの交渉に入るといので、北海道の農民は今真っ赤になって怒っているんですよ。このままいったら北海道農業は潰されてしまうのではないかという危機感が非常にあるんですね。じゃあ、君たち何とかせよと言っても、全く何とかする術がない。オーストラリアで自然に生えている草原に放している牛の肉を持ってきて、北海道と競争せいと言ってもなかなか難しいんですね。そういったようなこともございますので、今後の計画にはそういうタイムリーなものもどんどん入れていって、この開発分科会としての意見を入れたいといけないのかなと、これを見ながら痛切に感じておりましたが、これは今後の問題としてひとつよろしくお願い申し上げたいなど。このことは北島先生がおっしゃっていただければ、本当は一番いいのかもしれませんが、どうぞよろしく申し上げます。

以上、本当にご苦勞様でしたと申し上げたいと思いますし、今後も一層我々でできるご協力はしてまいりたいと、こう考えております。ありがとうございました。

○丹保分科会長 それでは、今、井須さんからお名前が出ましたので、北島委員、どうぞご発言くださいますか。

○北島委員 今お話ございましたが、勉強不足でございまして、先日いただきましたものを一読させていただきました。当てはまるかどうかわかりませんが、私がずっと感じてきたことは、この中にはかなりきめ細かく出ていまして、立派につくってくれたなと思っております。

中から一部、安心・安全な国土づくりという話が出てございまして。これは、特に役所の方もおりますからお願いをしたいことは、どうも北海道の気象の言ってみれば発表と申しますか、天気予報と申しますか、そういうものが中央に比べて少し粗でないかと。案外きめ細かくないと思っております。先日、10月6～9日まで、低気圧、台風以上のものが来まして、北海道も三百数十億の被害が出まして、私どもも水産が162億、まだこれはホタテのほうが出るともっと出るんですが、被害を受けました。このとき浜のほうからえらいお叱りを受けましたが、天気予報の中で、いろいろなテレビがやっておりますが、「低気圧が発達する」と言ったのは1つだけでして。あとは「弱まるであろう」と言ったと。したがって、網を取るのを少し控えておった、被害が出たと、こういう話であります。これは後の祭りなんですけれども、何とかどういうふうになるか専門的なことはわかりませんが、ぜひ果実であろうが、農業であろうが、いろいろなことで被害を受けるわけですから、安全・安心を考えるとすれば、災害も含めて、気象庁にもっと金を注ぎ込んで、

いい機械があれば、そういう機械を導入してやっていただくように今お願いを申し上げたいなど。これが1つでございます。案外、根室半島から離れますと、「東北洋上に低気圧は去った」というようなきめ細かくない報道がされるようでございますので、これを少し入れていただければありがたいなど。

それからもう一つは、私は、道路をいつもお願いをしているんですが、これは観光も、水産・農業も含めて、生産物が短時間で消費地に運ばれる。札幌でも小樽でもどこでも運ばれるとすれば、道路網をもっとやっていただくようにしていただきたい。観光もできれば飛行機で重点的に行ったら、あと、バスですずっと北海道を回れるようなやり方をすれば、意外と安く観光できる。イタリアは大概そういうふうに着陸して、ミラノに降りますと、あと二百六十何キロくらいをベネチアのほうへ行って、フィレンツェのほうへ行って、ずっと行ってローマへ行くというようなやり方でやっていると、イタリアの観光はえらい安いわけですが、そこらへんが飛行機から飛行機というのではなくて、それは産物にもいい影響を与えますし、また、その他のものも、それから観光にも大変いい影響を与えますので、より一層開発局としては、道路網をさらに高規格みたいなものを充実していただければ大変ありがたいと、これは切なるお願いでございます。

もう一つは、産業を発展していくために、北海道の水産を見ますと、3つに分かれました、せいぜい発展しているのがオホーツク海、太平洋はどうかこうにか四苦八苦しながらも、日本海はまるきりまずいというのが、ちょっと言葉は悪いんですが、なっております。これは一つには労働力が少なくなっていくこともございますが、これからは外国人労働者を、先ほど人口の話がございましたように、外国人労働者を入れられるような形をとらなければならぬだろうと。今、水産の場合ですと、外国人労働者を入れるとしますと、地方自治体・商工会・農業団体、この3つは、商工会議所・商工団体、そういうような形でありまして、水産は入っていない、地方自治体と、こう入っているんですが、水産にはそれがないというようなこともありまして。そこらへんをもう少し考えていただいて、研修生なのか労働者なのか。ある時期にはやがては外国人が入って来て住み着けるようなことも考えながらやっていかなければ、農業も漁業も水産も加工業も衰退していくおそれがあると思いますので、そこらへんを専門的なことはわかりませんが、少しご検討をいただければなど、そんなことを考えてございます。ありがとうございます。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

東京の1平方キロメートル5,500人という人間と、北海道の100人を割っているところだと、北海道も札幌周辺と東と北は違いますよね。それをどうするかというので、ぜひ次の段階には、本格的に議論をしなければいけないなというご提案だろうと思いますので、たぶん事務局は記録してくれていると思いますから。ありがとうございます。

どうぞ、飯島さんどうでしょう。小さな島からちょっと大きな島へ来られて、何をお考えでしょうか。

○飯島委員 ありがとうございます。北海道に暮らして1年半がたちましたけれども、それまで北海道に観光で行くことがありました。大変憧れて、お金とお休みをためては行っただけですが、今思い返しますと、先ほどほかの先生から発言がありましたけど、どこへ行ってもカニが食べれて、どこへ行っても同じものが食べれるので、札幌界限で終わらせちゃっていたと思います。今、空知・留萌が選挙区なんですけれども、そこに観光客がわざわざは来てくれません。それはやっぱり北海道の地域特性が、どこでも同じものができて、同じ景色が見えるということで、札幌に一極集中していることが、札幌のこれからの発展は大事なんですけれども、北海道を全体で強くしていくには、地方への目線をもっとつけなければいけないのかなという気がしています。

具体的には、自分の選挙区内で夕張がありますけれども、今回、破綻しまして、高橋知事が非常に頑張ってくださったおかげで、財政再建のめども立ってきましたけれども、やはり破綻寸前の自治体がたくさんありまして、その中で、先ほど井須会長もお話しになりましたけど、急がなければいけない、タイムリーなもの、このとりまとめは、本当にすべてを網羅されていると思いますが、では、これを具体的に地元で、様々な企業が目にしたときに、「じゃ、どうすればいいのよ」という声が聞こえてきそうな気もするんです。全部網羅しているからこそ、逆に、その後どうすればいいかわからないと。書かれてはいるんですけども、よりこれは特に急いで、特に重点的にという強弱をもっとつけていただきたいという気が個人的にはしています。

その中で言えば、今のところで言えば、田園コミュニティというような表現で地方があったんですけども、表現としては、田園コミュニティのままでは人が暮らせない。病院はないわ、高校はなくなるわ、お医者さんはいないわ、仕事はないわということで、コミュニティ自体はもう崩壊の危機でもありますので、そういった危機感ももう少し、この基本政策部会の報告書には合わないのかもしれませんが、危機感もあるので、そういったものも含めた表現がいいのかどうかわかりませんが、田園コミュニティ地域にはまだまだほど遠い現実についてどうすればいいかということがあると思います。

産業の誘致とかいろいろなことを国会議員としても頑張らなければいけないと思うんですけど、例えば自分の選挙区内走り回っていて、まず携帯が繋がらないところがいくつもあります。携帯ですらだめです。地デジがこれから全国でということになりますけど、産業を誘致するに当たって、東京と北海道と距離がありますけど、情報だけは共有化できなかったら、もうここは致命的なものになると思いますから、情報は特に力を入れて、北海道全域で、どこでも情報がすぐ手に入るという体制づくりをしなければ、企業の誘致もそこでまたストップしてしまうことも大いにあるんじゃないかと思います。そういった意味で、ぜひ情報通信の関係についてはしっかり整備をして、過疎地やへき地、離島などには特にまず力を入れていって、そして、最終的に心臓部分の札幌がしっかりと下支えしているというような形づくりをしていかないと、北海道は広いですので、小さな島から行



きまして、本当にそう思いましたので、北海道の四方八方のよさを出すには、やはり地方への目線をもっとこの中に盛り込まねばいけないのではないかという気がしております。

すみません、たくさん申し上げました。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

それでは、一番大きなかたまりの札幌市がご意見残りましたので、札幌が一人勝ちになっちゃ困るなどかいうことを含めてご発言いただけますか。

○上田委員代理（下村市民まちづくり局長） 札幌市の市民まちづくり局長の下村でございます。きょうは市長の上田が、明日からの雪まつりの開会式を控えまして、海外から来賓がいろいろいらっしゃってまして、きょうのこの会議にはどうしても出れないということで、私、代理で出席をさせていただきました。断片的な知識しかございませんので、唐突なことを言ってご迷惑をおかけすることがあると思いますけれども。

今回のこの報告書につきましては、1年以上にわたる基本政策部会等の議論、それから1,000件以上のパブリックコメントということで、我々道内自治体にとっても非常に今後の政策の方向付けの指針になるものということで、ありがたく受けとめさせていただきたいなと思います。

今後の計画策定に向けて、我々もいろいろ期待をしているところでございますが、並行して、札幌市も道都として、これからの北海道全体の発展に貢献できるような、そういう政策を何とか打っていかねばいけないなと考えております。常日頃からも、まずは石狩圏の札幌の近隣の市町村と共通的なことはどんどん共通化していこうと取り組んでいます。または、役割分担をして、観光の話で言えば、私どもは第二の時計台をつくる意味も何もないですから、どんどん新たな観光資源は、周辺の市町村の方々に開拓をしていただいて、そのいわゆるプラットフォーム的な都市機能として札幌が連携をしていくことが、相互に発展できることかなということで、今模索しているところでございます。

それと併せて今、我々札幌市で、将来の北海道の発展のために何かできないかということで考えているのは、札幌に所在している大学との連携、それが大学と自治体だけではなくて、大学と地域と我々自治体ということで、三者連携がうまくできないだろうかということで考えています。それは、少しでも産業化を目指してという意味合いもありますけれども、実は最も懸念すべき問題が今、少子高齢化の数値にあらわれてまして、全国一激しい高齢化・少子化で、これの背景は何かというと、実は人口動態を見てみると、年齢18～30歳ぐらいまでのまさに脂っこい世代がほとんど本州に多く転出してしまっている。これは少子化にももろに響いてくることで、それから、これからの北海道開発を誰が生涯かけて背負っていくのかと、そういったことの問題にもなりますので、私たちはこれからそういった大学を卒業した優秀な人材が少しでもこの道内の特に札幌にとどめておけるような、そういう政策も考えていきたいと思っています。ですから、今後のこの国土の開発に当たっての計画策定においても、人材の開発と補完ということを考えていただ

ければありがたいなと思っております。

以上でございます。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

ひとわりご意見をいただきまして、この6期の計画のまとめということが一応これでよいのかどうかということは、大体が、これでよろしいのではないかというようなご意見であったと思いますが、これを分科会としてお認め申し上げると言うのもちょっと変なんですけれども、これは分科会として受け取らせていただきまして、以後、分科会でオーソライズされたものという扱いをさせていただいてよろしいかなということをまずお聞きしたいんですが、ご意見はございましょうか。よろしゅうございましょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○丹保分科会長 ありがとうございます。

それでは、南山さん、大変ありがとうございました。

それでは、これを分科会でオーソライズされたものという格好にさせていただきまして、これをもとにして国土交通省の中でいろいろご議論を進めていただく。さらには、次の我々の議論を、これを土台にして進めるということにさせていただきます。どうもありがとうございました。

それでは、この次のステップになるわけでございますけれども、できれば、この分科会として、次に向かって何を申し上げるかというようなことを、非常にコンパクトに2～3つぐらいのアイテムに集中しまして、この報告をさらに次にどう伸ばしたらいいかというふうに進めたいと思うのでございますが、今随分ご意見をいただきましたので。教育の問題がありましたし、農業、それから水産の北島さんからいろいろな問題があると思うんですが。労働力の問題もございました。それから、小さな島の中で札幌と札幌でないところをどういうふうに見ていくか、いろいろなことを言われてまいりましたが、次の計画に当たっては、かなりめりはりをつけて議論をしなくてはいけないだろうと思っておりますので、そんなことについてさらに加えていただければと。

それから、ずっと読みますと、全部書いてあるんですが、個々にこれだということを、レビューでございましたので、あまり強調しにくかったんだと思うんですね。したがって、この次、どこを突破口にしようかという話を、次の計画ではしなければいけないわけでございます。教育の問題でも、高等教育機関があることが価値であったという時代は、もうすでに過去のものでございまして、それが地域の中でどうするか。ある一定以上のレベルを持った高等教育機関であれば、それが国の中で、世界の中でどういうふうには羽ばたけるかと、それは地域を除外してはあり得ないわけでございます。そういうことが国土交通省の権限ではもしかしたらないかもしれないと。しかし、この分科会としては、いろいろな議論をするときに、そういう議論もしておかなければ、たぶんならないのだろうと思っております。

幸いなことに北海道は、大きさに比べて国立大学の数が非常に多いです。単科大学が多いせいもありますけれども、数は非常に多いですね。そして、私立大学もいくつか有力なものが出てまいりました。そういうのはどういうふうに組むかというようなことを将来の大きな議論にしなければならないんですが、今どちらかという行政はそれにはさわらないというような格好でやってきた過去の経緯がありますので、これは文部科学省の独占的所管でも何でもないので、そういう議論はぜひさせていただきたいと。

先ほどの観光の問題につきましても、厚みのあるというお話をいただきました。要するに、カニを食べさせて、泊まって、同じところをぐるぐる回って、4日回ったら、2回目はもう来なくてもいいよというような観光だったら、ないんですね。とすれば、そこへ行って、もう一回来ることもあれば、そこへ行けば何か勉強できて、自分が成長できるというような、かなり滞在型の観光もあるでしょうし、そういうことに関しては、まだ北海道はちょっと自力がついてないために、アイデアだけがあってもなかなか動かないと。それはたぶん教育とも連携しなければいけないでしょうし、まちづくりとも連携しなければいけないだと思います。

そういうことをきちっとこれから担保していくことによって先に進まなければいけないし、それからエネルギーに一番弱いのは、日本では北海道です。たぶん電気が止まり、ガスが止まれば、北海道は全部凍え死にしてしまいます。本州は布団をかぶっていれば生き残れますけれども、これはものすごく弱いのですから、それをどういうふうに……。たった60万ケーブルでしか津軽海峡でつながっておりませんから、それが切られてしまったら、もう生きていけなくなります。これは第一次石油ショックのときにひどい目にあった経験があるわけですが、そういうことを含めてどういうふうにか考えるかという問題も当然出てこなければいけないので、エネルギー問題は非常に大きいです。

それから交通問題も大変大きな問題で、冬の除雪の問題もありますし、それから新幹線の問題もさることながら、北海道内のローカル線と申しますか、あれがローカルなのか、北海道にとっては基本的なループ線だとは思いますが、そういうものをどうやって維持していくか。それから、稚内へ抜けている足、逆に言えば、函館に抜けている足を、どうやって我々北海道の中で維持できるかというような問題もあるでしょうし、そういう問題を含めながら、これから次の計画、7期になるのか、新しい計画になるのか、名前はわかりませんが、ご議論をいただかなければならないんだらうかなと思っております。

前に、森地先生が、北海道が東京にぶら下がっちゃいけませんよということを何回もおっしゃっていました。これはぶら下がるのではなくて、北海道が極端なことを言えば、東京と違ったスタンスで生きていくにはどうしたらいいかという議論をしなければいけないんだらうと思います。東京は東京だけでは生きていけない。これはもう巨大なガンでございまして、水も全部外からもらう、電気も全部外からもらう、食べ物もほとんど全部外からもらう。どんどん増殖します。もし東京を日本から切り離せば、シンガポールや香港

はめでもない。問題なく東京が強い。日本のほかがぶら下がっているから東京は動きにくいということもありますし、ぶら下がっているから生きているということもあるので、首都圏の部会長をさせていただいておまして、同じ10ヘクタールの緑が北海道と東京では、こんなに価値が違うんだなと思ったこともございます。これはぜひいろいろなことを我々は頭の中でこなして、北海道のことだけじゃなくて、東京と北海道で北海道と、それから東京と北海道で東京と考えていけないといけないわけで、ほかの地区にもたぶん当てはまると思います。東京の方々に聞いて「納沙布岬へ行って北方領土を見た人がおりますか」と言ったら、ほとんどおりませんね。それで北方領土の議論をしたって、これは見たこともないんですから、議論にもならないですね。知床の山へ上がれば、目の前に国後から煙が上がっているのが見えるわけですからね。そういういろいろなことが我々にとっては非常に違ったことで展開しているんだと思います。

ちょっと座長がよけいなことを申しましたが、次の計画は、どこを突破口にして、我々は次の時代、次の10年をどうするかと。この報告書にも、世界の潮流は変わってきているとか、大転換期であるとか、すでに書かれておりますが、どういうふうに認識しているかということをもう少し突っ込んだ議論をしなくてはいけないと思いますね。大転換期とは何なんだと。世界の潮流って何なんだと。もしかすると、右足でアクセルを踏んで、左足でブレーキを踏んでいるんじゃないかと私は思って仕方がないんです。そうすると、ブレーキを踏みながらアクセルを踏んだら何が起こるか。誰が考えたってとんでもないことが起こることはわかるわけですね。放したら暴走してしまいますよね。そういうことを含めて、今我々が置かれている状況を、もうちょっと広い立場で、長い歴史の中で北海道をもう一回見直さなくてはいけないんだらうかなと。150年しか歴史がない島ですけれども、その150年は世界で言えば200年間の途方もない近代の増殖時代の一番うまいところを食って成長しましたので、それがなかなかうまくいかなかったということ、どういうふうに我々は理解したらいいんだらうかと。たくさんの方をこれから北海道自身が今までの延長線上でないとここで議論をしなければいけないのかなと思っております。

私もこの報告書を読ませていただきまして、南山部会長のお手元で大変なご尽力をいただきまして、本当によかったなと思っておりますが、次はもう少し突っ込んだ話ができたかなと思います。

それでは、ちょっと私イントロダクションが長くなり過ぎましたが、次に、いろいろなことを2~3つ提言で、このものを使ってキーワードを出したいというときに、今日随分お言葉をいただきましたから、たぶん事務局はしっかり拾っているとは思いますが、加えて何かキーワードに相当するようなものがあったら頂戴しておくと、事務局が議論をするときに、そして、もしかすると、また南山委員にお願いをして、少しまとめることをご相談しなければいけないのかなと思いますので、そのときにプラスになるお話、考え方がありましたら、若干の時間をいただいて頂戴したいと思います。

これは事務局のほうも遠慮なく。事務方も遠慮なくおっしゃってください。ここから先はプロポーザルですから、もうファクトなしでおっしゃってくださって結構でございますから。どうぞ、どなたからでも、局長からでも、開発局長からでも結構ですから、どうぞ。

森地先生、何かあったらお話しくさいますか。

○森地委員 いつもこれも申し上げていることですが、前回にこの第6期計画「明日の日本をつくる北海道」という、この前段になったのは、「フロンティア精神を持っていた北海道はどうしたんだ」と、そういう報告書のまえがきがたぶん前段にあったんだろうと思います。そうしたときに、次のステップはもうちょっと前向きの話が欲しいなというのが1つでございます。例えば「明日のアジアに輝く北海道」とか、「明日のアジアを〇〇する北海道」とか何かそういうメッセージで、もう一回すべてのことを点検するということが1つでございます。

もう一つは、市の方がいらっしゃるときに大変失礼なことを申し上げるのをお許しいただきたいんですが、全道の50%の人と活力を集めている、その札幌は、北海道のリーダーとして、リーディング役をちゃんと果たしているのかというのが私自身の思いでございます。産業があるところに都市が発展したという時代から、都市がいろいろな産業を生む時代が変わったと、こう言われたのは1980年頃、アメリカで西海岸とかフロリダとか、あるいはアトランタとか、ああいうところに行った時代で、そういう意味では札幌にあれだけの集積があるのに、北海道全道に貢献するような産業が生まれてこない、あるいは非常に特殊な新たな時代を開くような人々が生まれてこないのを一体どう考えるのか、ここは大変気にかかるところでございます。今、国土計画の中で札幌は対象ではないんですが、各ブロックの中心都市のリーダー役としての機能をもう一回再点検してほしいと、こういうことを申しております。

丹保先生にも大変失礼なことを申し上げるんですが、北海道の留学生の数は大分県より少ないんです。大分県がふくらんだのは、単に立命館を平松さんが持ってきただけなんです。北大には北大の歴史があり、小樽商大の歴史があり、帯広畜産大のああいう非常に立派な歴史がある、そういうところで何でそんなことになってしまったのかと。これも札幌という都市にもっと頑張ってもらいたいなど、そんなことです。ちょっと抽象的なことを申し上げました。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

周りを全部共産主義圏に囲まれてしまって、九州と同じように協働できないというものすごいハンディキャップはあるんですけども、それはそれとして、今先生がおっしゃったことはよくわかりますし、北海道のフロンティアスピリッツと、私は北海道大学の総長を長らくやっておりましたので、そう言っているんですが、あれは、要するに西海岸までフロンティアが来て太平洋に落ちこちて、太平洋を泳いで、クラークさんだけじゃないんですが、クラークさんたちが北海道まで泳ぎ着いて、そして、日本海で終わったと。です

から、極西の地なんですね。日本の大体は極東なんですね。極東というのは東北で終わっているんですね。したがって、極西と極東という、その極西の地が奮わないというのは、やっぱり極西だけではいけなくなってしまうという、シベリアに上陸できなかったというか、大陸出兵もやったり、変なこともやっちゃったんですけれども、そういうことを含めて、北海道は極西の地だということ。

それからもう一つは、札幌の人口は、北海道の田舎からの集中なんですね。したがって、それは暮らしが非常にやりやすいから札幌へ集まってきたんだと思います。私が子どもの頃は、札幌の人口は20万人でしたから、今190万です。僕の1代で10倍になったんですね。その集積を見ると、先生が今おっしゃったようなことは、本当に私も住んでいて痛切に感じます。したがって、札幌市がどんどん生活しやすい街としては大きくなったんですが、活力のある街としては、なかなか大きくならなかったというのも事実だったと。決してそのことを言い訳するわけではありません。ですから、何かをしようということが札幌から出てきたことはありませんね、市民からは。これからはそうはたぶんいかないだろうと思います。どうもありがとうございます。これは本気に考えなければならないことだと思いますし、そんなこともぜひ札幌の人たちとみんなに議論をしたいと思います。ありがとうございました。

さて、どうぞご発言をいただいて、こうしたらということが、もし先ほどのご発言に加えてあったら。

聞いていて、開発局長は何かないですか。日頃思っていることで。

○本多北海道開発局長 産業界や自治体など様々な方々からお話を伺いしましたが、北海道開発に対する期待が非常に大きく、そのため次期計画に対する期待も大きいと感じております。

いろいろな意見を頂戴しましたが、様々な課題について、北海道の持つポテンシャルを有機的、重層的に結びつけて考えていくことが今後の北海道開発に必要なことと考えております。また、北海道開発は北海道が遅れているから進めているのではなく、北海道が我が国の諸課題に応える大きなポテンシャルを持っているから進める必要があるということを強調していきたいと考えております。

○丹保分科会長 北海道局長、何かありましたら。

○品川北海道局長 今回、さっきご発言ありましたように、パブリックコメントでも1,000人を超える方から大変多くの意見をいただいた。私どもは、正直言って、桁が1つ違ったので、随分驚いたところであります。

先ほど、井須さんからも、読んで感動したというお話をいただいたわけですが。計画はつくることに目的があるのではなくて、それを実行することに目的があります。当たり前のことなんですが、そういうことを道民、あるいは関係する人に感じていただけるような、ある意味のメッセージ性を持った計画というようなこともあってもいいのではないかと

うことを私自身思っています。そういうことで、また、深い議論を皆さんにお願いしたいというお願いを申し上げたいと思います。

○丹保分科会長 どなたかほかにご発言ございませんでしょうか。

今、開発局長からお話がありましたが、付加価値というものは、いくら足しても所詮は付加価値なんですね。基本的な価値をつくれるかどうかということにかかっているんですが、北海道が本当に基本的な価値をプロポーズしたことがあるかないか。あるとすれば何なんだという話をもう一回次の機会では議論をしたいと。付加価値は努力に応じて得られるものは小さいんです。基本価値はつくれば、それは非常に大きく伸びるんですね。ですから、北海道が付加価値を追っている限りは、人口密度とか、現在のアクティビティーの高い他の地域に絶対にこれは追いつけない。だから、基本価値が何であるかという議論をやっぴりしなければいけない。それを150年前はたぶんやったんだと思うんです。それを忘れてしまっただけではないかなというふうにも思います。

嵐田副知事がちょっと手を挙げましたから、嵐田さんからどうぞ。

○高橋委員代理（嵐田副知事） 今後の検討に向けて、将来の北海道の在り方に関する理念ということでございますが、せっかくの機会なので、道の新たな計画づくりの今の状況を簡単にお話しさせていただきたいと思います。

その前に、先ほど森地先生から、国際化の視点、あるいは産業の重層化、北海道ブランドがあっても地域ブランドがないというお話がございました。まず、この4年間高橋知事がやってきた改革的なことは、経済構造の改革と、地域主権の確立、あるいは行財政改革ということであり、18年度は最後の年でございますけれど、3つの呼びかけを道民にしてございます。

1つは人口減少時代。これはきちんと受けとめて、それにふさわしい新しい地域づくりをしようじゃないか。2つ目は、北海道の素晴らしい環境と経済の調和するモデルをつくらうじゃないか。3つ目は、世界の中の北海道という意識を常に持ち続けて、いろいろな取り組みをしてほしいということでございます。

そして、今つくり始めている新しい総合計画の骨格では、大きく目指す姿として3点、まだ抽象的な段階ですが、掲げてございます。1点目は、産業あるいは雇用政策ということでございますけれども、豊かな大地で、人々が希望を持って働き、そして、世界に躍進する産業が展開する北海道ということでございます。先ほど来議論がありますように、産業政策は、簡単に言いますと、今あるものをきちんと育てる。そして、なければ、技術開発等やって興す。それでも足りなければ、外から導入する。この育てる、そして興す、導入するという3点に集約されるのではないかと考えてございます。そういった意味で先ほど大学の話もございましたけれども、大学や研究機関における人材育成、あるいは産学官連携といったことにも、どう進めていったらいいかというあたりを少し議論を深めて、厚みある産業政策に持っていければと思ってございます。

2点目は、エネルギーあるいは環境といった問題や、暮らしにゆとりと安心を実感できる北海道。こういった視点で循環型社会の構築、あるいは新エネルギーの開発、そして、今議論になっているコンパクトなまちづくり、こういったあたりの政策論を今後詰めていこうということでございます。

最後の3点目は、自己決定の仕組みと申しますか、地域主権の取り組みが広がり、誇りと愛着を持って住み続けられる北海道、共に発展する地域づくりといった視点で、都市部とそれ以外の地域との有り様といったものなどを議論しようということでございます。

現在、パブリックコメントは終わり、あとは、市町村や有識者のご意見もいただきながら、19年度のできるだけ早い時期に原案をまとめ、19年度内に新しい総合計画を策定したいと考えているところでございます。今後とも、北海道局を始め関係機関と密接な連携をとって作業を進めてまいりたいと思っております。

○丹保分科会長 ありがとうございます。

大体ご意見が出てきたと思うんですが。尽くしたとは申しませんが、大体出たという気がします。さらに加えてご意見がございましたら、意見交換はここで一応の上がりにはしたいと思っておりますが、よろしゅうございましょうか。

ありがとうございます。

それでは、次の進行をどうするか。総務課長さんからお願いします。

○山下総務課長 それではありがとうございます。

次回の分科会の日程につきましては、また、改めてご相談をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたしたいと思っております。

それから、本日お配りいたしました資料につきましては、机の上に置いていただければ、後ほどお手元にお送りをさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたしたいと思っております。

○丹保分科会長 一応議論をすべきと言われておりましたことは終わりましたので、ちょっと時間は早うございますけれども、終わらせていただきます。

どうもありがとうございます。また、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

閉 会